



洋書輸入協会会報

Vol. 29 No. 11 (通巻342号) 1995年 11月

フランクフルト・ブックフェアとその周辺

極東書店仕入部 小幡利夫

10月11日から6日間開かれた第47回目のブックフェア、私自身としては3年ぶりの訪問です。会場入口をふさぐように並んだ古書店や雑貨の「屋台」を通り過ぎ、9時丁度でないと開けてくれないゲートの前で待つ間には、プレッシャーと期待で神経質にならざるをえません。ヘビースモーカーの私にとっては、この時の一本が何よりなのですが、まだ「全館禁煙」になってなくて良かったというのが第一印象です。

◆ 学術書出版は楽しくはない？

極東書店は社会科学専門店ですので、カラフルなディスプレイでいかにも楽しそうな児童書や美術書のブースには縁もなく、たくさんの新刊書を山のように展示している小説・文学のブースも横目で眺めて通り過ぎ、地味で、だいたい狭い学術書出版のブースを訪ねて歩き回るのが、フランクフルトでの一日の仕事ということになります。

統計的な裏付けはありませんが、学術書出版社はどこでも激しい生き残り競争のさなかにあると感じました。特にアメリカでは公共・大学図書館予算の削減で、「継続注文の打ち切り」や「市場の縮減による出版計画の見直し・削減」、「ハード版からペーパー版への企画変更」を迫られているという声を聞きました。

あるいは巨大出版・情報コングリマリットの傘下に吸収されて、説明を一度聞いた位では解らないような会社構成の変化、組織の変更に追いつけられている出版社もあります。無論、独自の編集権と販売戦略を維持しているところも数多くありますが。

とはいえ、歴史と伝統を大切にしつつ意欲的な企画を語ってくれる出版社に会えたり、志をもって新たに起業した出版人と会話できるのは、何よりもブックフェアでの楽しみです。その意味では、ドイツ・イギリスの出版社に比べて、アメリカのほうがちょっと元気がないように感じたのは偶然なのでしょう。

元気印という点では、国連出版局や世銀/IMFが主催したレセプションの会場で出会った開発途上国の面々です。「万博の時に訪日したことがある」から始まり「なぜわがブースを訪れないのか」、「東京のメッセで共同でブースを出せないか」など、ワインやビールの力も借りてか、即答できない質問ぞめにあいました。

また他人事なのかとも知れませんが、メッセに出店する日本の出版社のうち、常連であつたいくつかの著名な出版社が出店を見合わせた由。それぞれの企業事情はあるのですが、ドイツ人にとっても気掛かりではあったようです。フランクフルトにはもう魅力がないというわけではありませんまい。

目次

フランクフルト・ブックフェアとその周辺	1	文化厚生委員会だより	4	洋書輸入協会史(101)	6
海外ニュース	3	総代理店ご案内	4	広告	8
うちの会社	3	インターネットによるコミュニケーション	5		

◆ もっと便利なメッセに！

さて、せっかく訪問記を書く機会を与えていただきましたので、メッセ主催者に要望があります。(協会のどなたかに主催者への連絡をお願い致します。)

始めの3日間は一般には非公開のはずですが、どうみても学生としか見えない若者が会場に來ています。通路をうろうろ、アポの時間に間に合うように急ぐ我々には迷惑なのです。(犬のホールへの入場も制限できないのでしょうか。人よりも大きいレトリバーやシェパードに突然出会うのは、犬好きの私でも仰天します。)

また、郵便局はありますが、会場内に国際宅配便のサービスがあればどれだけ便利でしょうか。カバン一杯のカタログを毎日ホテルまでかかえて行かなくてすめば大変助かります。

来年からは会場が拡張されるようですので、アポの取り方によってはホールからホールへの移動が大変なことになります。ついては、会場内のバスの利用が不可決ということですが、行き先案内や路線図など利用しやすい工夫をお願いしたいところです。

◆ よいドイツ、もしくはわるいドイツの印象

メッセでの仕事は土曜日までにして、その後も滞在しましたので、ドイツの市民生活をかいま見ることができました。短い旅行の部分的な印象で全く解るわけではないのですが、見聞きした事柄をいくつか。

メッセ会場だけでなくどこでも、人造物・紙・生ゴミという区分によるリサイクルのシステムは日本よりかなり進んでいます。会場内の「屋台」で飲物を頼むと黄色いチップをくれますが、プラスチックのカップと一緒に返すと2マルク返金してくれます。日本でもビール瓶を

酒屋に返すとたしか5円返ってくることになっていますが、この方式を広げていくのもリサイクルを進めるのに役立つに違いありません。

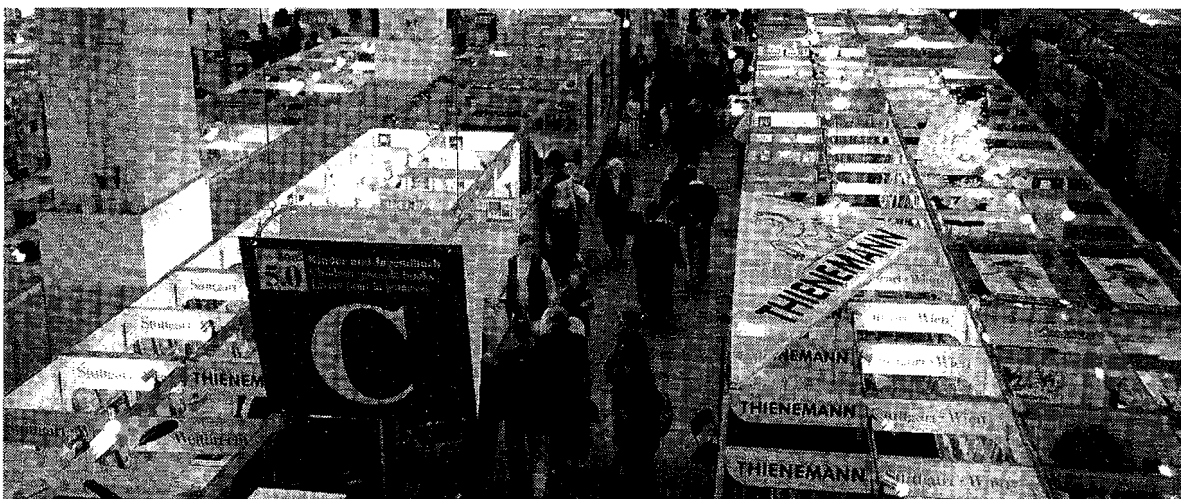
フランクフルト中央駅前の風紀の悪さは有名ですが、3年前に比べてたむろする人が少なくなっているのが現地在住の方に尋ねたところ、「今年からドラッグを薬屋で買えるようになった」ということです。良いことなのか悪いことなのか即座には判断つきかねるところです。

これまで電話する場合はホテルか旧知の出版社のブースの電話を借りていたのですが、今回は初めて公衆電話を使いました。1マルクを投入すると、最低30ペニヒのはずですが、お釣りは返ってきません。なにやらだまれされたような感じがします。

また、フランクフルト空港のマクドナルドで働いていた若い女性が全員「有色人種」であったり、タクシーの運転手の何人かが移民のようで地理にうかつたり、トルコ人移民二世に自動的にドイツ国籍を与えることは是非で議論があるといったような問題を見てきました。日本でもどうなっていくのか無関心ではられません。

◆ 本は国境を超える

「国際化社会」が云々されて久しいのですが、金やモノと異なり、人と人の交流は世に言い触らされているようには簡単ではありません。国境を超えて衛星放送でニュースが伝えられ、インターネットで情報が送られても、人が創造した言葉やイメージからなる「本」が「国際化」のためにどれだけ有用か図り知れません。世界の「本屋」が一同に集うメッセで、「本」の意義と役割を、それゆえに「本屋」の仕事のもつ意味を改めて見直すことができました。



’95年ノーベル文学賞受賞作家

S. ヒーニーと出版界

S. ヒーニー氏のノーベル文学賞受賞が決まったというニュースが入ってからというもの、アイルランドでは（北と南を問わず）お祝い気分が続いているという。一世紀にも満たない年月の間に四人のノーベル賞作家（ショウ、イェーツ、ベケット、そしてヒーニー）を輩出したことに、アイルランドの人々は誇りと喜びを抑えきれないようである。

こうした気分を反映して、受賞発表から2、3日の内に書店にはヒーニーの作品をもとめる人が殺到している。デリー出身のヒーニーは詩人としてこれまでも大変人気があり、数千部の単位で売れていたが、今回の受賞以来、品切れが続出している。

ダブリンのウォーターストーン書店では受賞発表の週の土曜日には、ヒーニーのオックスフォード大学の詩学教授となつてからの歳月を書いた最近のエッセイ集

“The Redress of Poetry”（Faber 刊）を除いてすべての作品集が売り切れてしまったそうである。同書店の担当者の言うには、ヒーニーの作品を買いそびれてしまった人はヒーニーについて書かれた本を買って帰るといふ。とにかくヒーニーに関する本なら何でも売れる状況で、ヒーニーの作品の批評等も例外ではない。

同じダブリンのホッジス・フィッグス書店でも同様でこれまでも良く売れていたヒーニーの作品がノーベル賞によって一気に盛り上がりを見せ、さらに波及的効果まで現れそうだという。ヒーニーだけにとどまらず、アイルランド作家全般、あるいは詩というジャンルそのものも人気が高まると予想される。ダブリンの外でもヒーニーの人気は熱狂的ともいえるほどで、書店には客が殺到している。

ヒーニー氏自身は、今回の受賞が決まった時は、夫人とギリシャで休暇中で、ニュースを聞いて驚き急遽帰国したそうであるが、この受賞を自身の名誉であると同時にアイルランドとその詩人たちすべての榮譽だと感じていると語っている。

—The Bookseller ’95. 10. 13号より抜粋—

うちの会社

株式会社 マテマティカ

小社はドイツ語専門店福本書院の系列会社で1964年5月数理科学洋書輸入販売の国際書籍株式会社として発足いたしました。その後他社より社名が紛らわしい旨のお申し出があり検討の結果1970年9月に数学をラテン語風に、マテマティカ（MATHEMATICA, Inc.）と改称致しました。電話等で一度ではなかなか聞きとって頂けなくて苦勞することもあります。名実共に数理科学洋書専門店に相応しい社名だと誇りと愛着をもって今日に至っております。

発足当初より毎月一日発行の新刊案内ニュース「マ

テマティカ」も今年11月で311号を数え、この間一号も欠かすことなくお客様にお届けすることができましたことは私のいささか自負するところでございます。

しかしながら昨今の不況は従来の洋書販売は好不況にあまり左右されない業種という伝説をくつがえし本の売価は下がり売上げは伸びません。又お客様から「換算レートはどのようにして設定するのか」の質問に頭をなやまして日々ではありますが、これからも理論物理・情報科学を含む数理科学の発展のために努力を続ける所存でございます。（福本 理）

釣り同好会

秋期アジ釣り大会が10月14日（土）開催されました。

観音崎近くの走水港、高司丸より参加者15名を乗せ出船、台風のウネリの心配もない快晴でベタなぎの釣り日和で、両サイドに竿ビシと手ビシに別れて乗り、走水港沖（水深30m位）で中小アジ、イワシをおみやげに釣り、12時すぎ潮止まり近くに水深50～60mの観音崎沖に移動、大アジをねらうが一向に釣れず（船頭もイネムりするくらい）船中30cmオーバーは2匹。腕も疲れたので3時納竿、船宿で成績発表、賞品授与のうえ自由解散。なお今回は釣り同好会開催以来10数年近くなる中、はじめての紅一点若き女性ユサコの田所さんが参加、手シビ釣りは初めてとのことで両サイド、及び船頭までが手とり、足

とり（？）のアドバイス。しかし手さばきはなかなか堂に入ったもの、余り釣果ののびない中21匹を釣りブービー賞を三つ巴で争う結果となりました。

来年春のキス釣り大会には一人でも多くのOBを始め女性の参加を呼びかけて楽しい大会にしたいものです。

今回の成績は 優勝 石川博章（内外交易） 75匹
2位 今井千秋（洋 販） 68匹
3位 若松吉三（南江堂） 62匹
4位 塚本忠夫（大洋交易） 48匹
ブービー賞 鈴木 亘（大洋交易） 21匹
以上（南江堂 若松記）



総代理店ご案内

◎ユナイテッド・パブリッシャーズ・サービス社

Tel. (03) 3291-4541

Fax. (03) 3293-3484

ジョージ・オーウェル著作集 特製版（全14巻）

George Orwell: The Works

新装クロス版 全14巻 箱入り 全5,214頁

ISBN 0-436-20357-X 1996年1月刊行予定

揃価 ￥199,750（予定）

（1996年1月末日まで）予約特価 ￥176,250（予定）

（Secker & Warburg）

ストッキスト業務停止のお知らせ

CRC Press, Inc. (U.S.A.)

Jossey-Bass, Inc., Publishers (U.S.A.)

小社は10月末日をもって上記出版社2社の取扱いを停止いたしますので、お知らせいたします。

インターネットによるコミュニケーション

紀伊國屋書店 会 津 淳

先月号で取り上げた電子メールによるコミュニケーションは、基本は個人対個人である。しかし現実世界でのコミュニケーションは個人対個人にとどまらず、多人数間でのコミュニケーションや、さらには不特定多数を相手にしたコミュニケーションが存在する。このようなコミュニケーションがインターネット上でどのように行われているかを今月はお話することにしたい。

電子メールを送るときには、相手のアドレスを指定する。当たり前のことであるが、これによってコミュニケーションの相手を特定していることになる。多くの場合には個人ひとりひとりが固有のアドレスを持っているので、個人を単位とした個人対個人のコミュニケーションといえよう。同報メールの機能を使うと複数の相手先アドレスを指定できるので、複数の個人を相手にしたコミュニケーションつまり個人対複数人となる。企業などでは組織や部署に電子メールのアドレスをつけることも行われているので、この場合には経理部や問い合わせ窓口といった組織がコミュニケーションの基本単位となり、個人対組織、組織対組織といったコミュニケーションになる。

それでは、あるグループ内でコミュニケーションをとるためにはどのようにしたらよいのであろうか。ここで役に立つのが同報メールである。グループに属する全員のアドレスを指定して伝えたい内容を送れば、グループ内でのコミュニケーションがおこなえる。しかしこの方法では、ひとりひとりがグループ全員のアドレスを知っていなければならない、構成員に増減があった場合にはその情報を全員に正しく伝えて反映させる必要がある。もし連絡に不備があって新規加入者のアドレスがある人だけにしか届かないと、その人からのメールが後から加わった人にだけ届かないといった問題が発生してしまう。そこでメーリングリストといった仕掛けを用意して、す

べてのメールは一旦メーリングリスト宛に送りここから再送信するようにすれば、グループ構成員のメンテナンスは一ヶ所だけおこなえばよくなる。メーリングリストには、開発プロジェクトのような特定の人だけで構成されるものと、存在や加入方法が公開されていても誰でも参加できるものの両方がある。

メーリングリストはグループを対象としたコミュニケーションの手段であるが、インターネットに参加しているすべての人を対象としたものとしてニュースがある。ニュースはパソコン通信の電子会議室のようなもので、誰でも発言することができ、誰でも読むことができる。メーリングリストのような加入手続きは必要ない。ニュースは様々なテーマ毎にニュースグループというものに別れており、多くは英語を共通語としているが、日本語が共通語になっているニュースグループもある。パソコン通信の電子会議と違うのは、ニュースの保管場所が世界中にあるニュースサーバーであることである。最寄りのニュースサーバーに登録した自分の発言は、順次世界中のニュースサーバーへ転送されていき、ニュースを読むときには最寄りのサーバーにアクセスして読めるようになっている。

今回ご紹介したコミュニケーションは、いずれも文字によるコミュニケーションである。絵や音をつけることも可能であるが、メーリングリストやニュースを読んでいるすべての人が絵を表示できる端末を持っている訳ではないので、現時点では文字だけが使われている。またどのようなメーリングリストやニュースグループがあるのかを探すのも容易ではない。何ヶ月か後にご紹介する予定のWWWではこういった点をクリヤして、不特定多数を相手にしたコミュニケーションを簡便におこなうことができるようになっている。

洋書輸入協会史 (101)

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

119 昭和40(1965)年度(s40.4月～s41.3月)の規約改正、理事改選、新入会員、退会者、業界消息など(前号よりの続き)

119.4 新入会員

(1) グヌング・アグング商会 東京都千代田区神田猿樂町1-3 新日貿ビル

代表者 村山俊男 資本金500万円

創 立 昭和40年2月1日 従業員4名

事業の種類 出版物輸出入、雑貨輸出入、図書出版印刷
最近の状況 現在輸出L/Cの手持額約85万米ドル、輸入実績2万米ドル。インドネシアの書籍の輸入を計画中。

親会社 インドネシアのジャカルタに本社を置くP. T. Gnung Agung。同社は同国最大の書籍輸入商であり、この数年間に日本のAsian Edition Clubのメンバーから、アジア版及び日本製英文書を数億円輸入している。なお、グヌング・アグングとは、バリ島にある最高の聖なる山の名前であり、グヌング・アグング商会は、同社と日本出版貿易との合併会社である。
入会の周知 昭和40年10月14日付、JBIA No. 217で会員に周知されている。

(2) 臨川書店 京都市左京区今出川通加茂大橋東入

代表者 武井一雄 資本金 壱千萬円

創 立 昭和7年 従業員 25名

事業の種類 和書・洋書共に新・古書籍・バックナンバーの仕入れ及び販売

実績及び最近の状況 戦前は主に中国書(漢籍)を直輸入販売、戦後は洋書部、日本書部に分け、全国各大学に販売、主として人文科学系、社会科学系を取扱う。昨年より出版部を設置、主にオフセット印刷による特殊書籍、バックナンバーを出版

入会の周知 昭和40(1965)年10月30日付、JBIA No. 218により会員に周知

(3) 富士洋書株式会社 東京都中央区日本橋小伝馬町1-7

代表者 小林圭五 資本金 120万円

創 立 昭和35年 従業員 8名

専門分野 建築・土木・化学工学、服飾・繊維・デザイン

入会の周知 昭和41(1966)年3月26日付、JBIA No. 225により会員に周知

その他 小林氏は大雅出版貿易に3年間在社された由

119.5 会員数

昭和39(1964)年度年度末(昭和41年3月末)現在の会員数は67社、これに対し昭和40年度内の退会者は4社。新入会員は3社のため、昭和40(1965)年度年度末(昭和41年3月末)現在の会員数は66社に減少している。

119.6 代表者変更、社名変更、住所変更など

119.6.1 代表者変更

(1) 福本書院

昭和40(1965)年5月25日付 JBIA No. 211により、福本書院の代表者は、福本初太郎氏より現社長の福本和子氏に変更の旨通知があった。

(2) 株式会社 教文館

同年6月付の挨拶状で、教文館代表取締役会長の北村徳太郎氏より、従来の取締役社長、松野佐武郎氏が退任し、新たに同社の専務取締役であった鶴飼香吉氏が取締役社長に就任された旨の通知があった。

119.6.2 社名変更

(1) アカデミア・ミュージック株式会社

昭和41(1966)年1月付で、旧社名アカデミア図書株式会社 取締役社長 平岩 林氏より、社名をアカデミア・ミュージック株式会社と改め、楽譜、音楽書並びに楽器の輸入に専念することとなった旨通知があった。

(2) 大雅貿易株式会社

昭和41(1966)年3月5日付、JBIA No. 224で、旧社名 大雅出版貿易株式会社が、大雅貿易株式会社に社名変更する旨の通知がなされた。

119.6.3 住所変更

(1) 日本書籍貿易株式会社

昭和40(1965)年5月1日より、大阪市北区真砂町2から、大阪市西区靱本町4-35へ移転。

(2) 北尾書籍貿易株式会社

同年8月16日より、大阪市南区安堂寺橋通り佐野屋橋ビルから大阪市北区中之島2-22、新朝日ビルディングの新事務所に移転した。また同社の東京支店は、同年5月より、東京都中央区銀座西6-3 朝日ビルディング

に移転、店舗を併設営業している。

(3) 旭屋書店

同年8月16日付、JBIA No. 214 にて、旭屋書店が大阪市北区堂島3-4から北区太融寺町33 大阪合同ビル3階へ移転した旨通知されている。

119.7 業界消息

(1) 関西支部泉屋書店の件

昭和40(1965)年5月6日の理事会にて、関西支部の泉屋書店のことが議題となった。同書店は、本部会費はきちんと支払っているにもかかわらず、関西支部会費はこの一年間納入していない。理由は支部は面白くない、支部会費は高すぎるとのこと。そしてこの一年は全く出席していないため、関西支部会員の一部には除名すべきだとの強硬意見も出ている由。

これに対し本部理事としては、大雅出版貿易の前例もあることであるし、本部より泉屋書店に善処方を申し入れ、関西支部にも今一度同書店と話し合ってみることを勧めることとする。

5月21日の理事会で、再びこの問題が取り上げられたが、会議途中に関西支部より電話があり、円満解決したとのこと。一同安堵する。

(2) 丸善雑誌部長交代

同年9月10日の理事会で、丸善の人事異動が報告された。即ち、従来の雑誌部長小林氏が人事部長へ転出、後任は高田課長が昇格することとなった。

(3) USACOの馬場雅久氏 JECへ

同年9月27日の理事会で、USACOの雑誌・書籍部長であった馬場氏の退社の挨拶があり、次いで10月1日付で、同氏がJEC取締役として出版ならびにこれに伴う業務を致すこととなった旨の挨拶状が各社に届いた。馬場氏は間もなくこの会社で洋雑誌の受注を担当し、やがて前金を貰った雑誌が入荷しないという事態が生じ、受注先に大変な迷惑を掛けるトラブルを惹き起こした。この件は、洋書輸入協会の会員外であるJECの問題であったとはいえ、迷惑をかけられた得意先は会員の共通の得意先であったことから大騒ぎとなったが、このことは後のことになるため詳述を避ける。

(4) Feffer & Simonsの東洋代表紹介

同年同日の理事会で、Feffer社の東洋代表としてアーサー M. 金子氏が紹介された。同氏は入社して8ヵ月、それ以前は暫く国務省にいた由。日本代表の牛尾氏はそのままとのこと。

(5) 明治書房 戸泉氏逝去

同年10月11日の理事会で、戸泉氏が10月9日に逝去されたことが報告された。

(6) 光洋書、富士ブックサービス設立の件

同日の理事会で、元海外出版貿易で、暫く郷里に帰って父上の事業を継いでいた吉兼三郎氏が、平河町に光洋書という新会社を設立したことが報告された。

また国際書房を退社した須賀氏が、新宿区大京町に新社を設立、富士ブックサービスと名付けた。社員4名とのこと。

(7) Otto Schäfer氏を囲む会

西ドイツ、ミュンヘンの医学出版社Urban & Schwarzenbergの有名な営業マンOtto Schäfer氏が定年退職されると聞き、永年親しんできた人達21名が集まって、同年10月6日、送別会が開催された。

(8) Holt社のYokom氏紹介

同年11月10日の理事会で、米国のHolt Rinehart & Winstone, Inc. で新しく日本代表に任ぜられたMr. Richard O. Yokomの紹介があった。同氏はMcGrawへ転じたLambert氏の後任で、夫人は日本人の由。

(9) 全日空航空機事故

昭和41(1966)年2月4日、千歳発の全日空ボーイング727型機が、羽田空港着陸直前に墜落、乗客133人全員が死亡するという大事故があり、各界の要人多数が含まれていた。当業界では、旭屋書店会長早島喜一氏、美術出版社社長大下正男氏、白水社編集次長篠田光夫氏の三方が遭難された。謹んでご冥福を祈ります。

119.8 懇親旅行、新年会

(1) 理事会旅行は、昭和40(1965)年度は取り止めとなった。

(2) 東西合同懇親旅行会

今年度より、初めて東西合同で懇親旅行を開催することとなった。

場所 静岡県浜名湖畔館山寺 宿泊 館山寺観光ホテル

日時 昭和40年10月1日～2日

費用 一人当たり¥3,500(交通費は別)

参加者 36名(前年は23名)

初の東西合同ということで参加者が多く、周辺地の観光を加え大変盛大なものであった。

(3) 新年会

昭和41(1966)年1月11日午後6時より、西武新宿線駅前芙蓉会館にて開催。

(続く)

研究者と読者を結ぶ、国際的情報企業

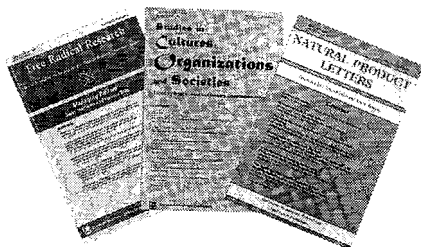
GORDON & BREACH

PUBLISHING GROUP

Gordon & Breach Publishers
Harwood Academic Publishers



科学及びテクノロジー、医・薬学、社会・人文科学の広い領域にわたり、毎年約200タイトル、これまでに約5,000タイトル以上の学術書、さらに約220タイトルの学術誌を発行。ノーベル賞受賞者を含む、世界のトップクラスの研究者の成果を世界の読者にお届けする、高水準の出版社。



Science Communications International (和書)

◆ 書籍

末梢神経解剖学
バイオテクノロジー

◆ 雑誌

燃焼の科学と技術
ディスプレイ・アンド・イメージング

G+B Arts International

- ◆ Fine Arts Press
- ◆ Craftsman House
- ◆ Verlag der Kunst

- ◆ Harvey Miller Publishers
- ◆ Editions des Archives Contemporaines
- ◆ Omni Media Associates
- ◆ Verlag Fakultas



日本総代理店

YOHAN (日本洋書販売配給株式会社)

営業本部

〒169 東京都新宿区大久保3-14-9

STMグループ

電話 03-3208-0186(直通) FAX 03-3208-5308

支店/札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡・沖縄・ロンドン・ニューヨーク

1995年11月

通巻第342号

洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03) 3271-6901 FAX (03) 3271-0920

印刷所一藤本綜合印刷株式会社